

幽玄

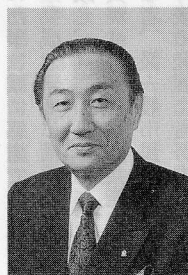
題字

高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟

会報 No.12

平成8年11月8日



横浜能楽堂の

舞台に立つて

横浜能楽連盟 会長 新堀 豊彦

七月七日、第十二回横浜五流謡曲大会で、私たちは初めて新しい能楽堂の舞台に立つことが出来ました。

六月二十八日の開館式からはじまり、二十九、三十と続いた記念能は、まさに横浜能楽堂のオーブニングにふさわしい、各流家元（五流全員揃うというのは珍しいのではないか）総出演、しかも二日連続の「翁」もあって、いやが上にも盛り上がりつつあることは御承知の通りであります。が、私たち素人としては、その後を受けて、念願の舞台で競演出来た歓びも、また大変大きなものがあつたと思います。

当に長い間の思いが、やっと実現できたことに感激、感動で胸のつまりる思いでありました。二日間の記念能で来演された職分の先生方も、その多くはかつての染井能舞台での体験、とくに六十才前の方々にとっては、初舞台等の思い出がこもっているだけに、やはり普通の舞台披きとは異なった受けとめ方をされておられたことと拝察いたします。

見所の出来ばえは最高でした。正面のみならず、脇正面、中正面、二階席に至るまで、それぞれ鑑賞に不都合なく、見やすく、しかも古い舞台とよくマッチした内装が心を落ちつかせ、演能にとけこむことが出来るのです。楽屋はやや狭く、その点多少使い勝手に問題がありますが、色々注文もついています。第二舞台、研修室、レストラン、展示廊を含めて全体を見れば、まずまずその豪華さの点でも、日本一の趣があり、横浜に新しい宝物が生まれたといっても過言ではありませぬ。市当局、市民の皆様にも厚く御礼を申し上げます。

願わくば、その素晴らしい舞台が、市民にとって、私たち愛好者にとって、利用しやすい、いつも使われ、愛される能楽堂に育ってほしいと存じます。

今の所、能も狂言も、すべての公演は即日完売で希望者が殺到し、御要望に応じきれないという嬉しい悲鳴があがっております。どうかこの勢いが、一時的なものに終わらないように念願し、横浜能楽堂の発展と能楽愛好者の拡大が、なお一層行われますことを祈念してやみません。

第十二回五流合同

横浜謡曲大会を終えて

新設横浜能楽堂の舞台披きの余韻もまだ覚めやらぬ七月七日に、恒例の五流大会開催の運びとなりました。各流精鋭多数の出演で番組も素謡十一番、仕舞十八番、舞囃子、連吟、独調等々、豪華で盛り沢山の内容となった。加えて熱心な能楽愛好者が多数来場され、見所も終日満席となる盛況ぶりであった。これは昨今の斯道益々盛なることを思わせ、心強く感じました。各流の多大な御協力により肅粛と番組が進行され予定どおりに終了致しましたことに対し、横浜能楽堂の皆様方、並びに各流



能楽連盟幹部の御挨拶

関係各位に厚く御礼を申し上げます。

（当番幹事・横浜宝生流連合会）

横浜能楽連盟の今昔

常務理事 田所 義男

第四十回を記念して出版された「横浜能の歴史」に新堀会長さんが詳しく書かれているが、私は人物を中心に能楽連盟を振り返ってみたい。

昭和四十三年十一月九日、故飛鳥田市長さんより庄司会長時代に横浜文化賞を頂き、横浜文化体育館においてその受賞式が挙行されて、役員全員が出席した。その当時の役員は八名であった。

賞状は複製して各役員に配られた。市長さんから頂いた物は、

故庄司会長宅に保存されている。然し当時の役員は既に他界された方が多く、現在高岡副会長さんと私だけとなってしまった。

庄司会長さんの時に安藤爲次教育文化財団が設立され、横浜市から当連盟、県からは神奈川県フィルハーモニー楽団が選ばれ、市内で奨励金の授与式が行われお茶の席に全員が招かれて、安藤爲次氏が車椅子で各々に渡された思い出は忘れぬ事が出来ない。その時頂いた金員は副会長であった小久保謙一氏が、当時三菱信託銀行横浜支店におられた関係で、同行の定期預金として預けられたが連盟の財政が豊かではなかったので、毎年横浜能が開催される前には借入れをして、又大会が終了すると返済するということが何回もあり、印刷代金は大会が済んで前売所より清算されて来た後に支払われたこともあった。当時、庄司会長を役員が支えて不足の時に分担した時代もあった。

庄司会長が亡くなられ小久保氏が会長と決定されたが、その年の春より病氣、国際親善病院を入退院を繰り返して秋の大会前に永眠され、皆様の前に発表される機会がなかった。その頃であったと思うが、安藤爲次氏が他界され、綱島の奥地の寺で行われた通夜には、高岡副会長

と私が参列し、翌日の葬儀には新堀会長さんが出席された。この年の大会直前に新堀会長さんが就任され、新たに役員も補充されて連盟の活動が活発に展開されて来た。爾来、市・県よりの助成金も増額され、又一般市民の方々の能に対する関心が深くなって、各流の切符も完売となって、会場は県立音楽堂・県立青少年センターと変わって来たが、横浜市内ホールでは第四十回記念の能も開催された。

この時、既に横浜能楽堂の建設も実現される事が決まった。その以前より募金の主体であった横浜能楽堂建設促進会は横浜商工会議所会頭上野氏を会長に数年前より瀧沢量治氏等、多くの方々によって各方面よりご協力を頂き、故郷郷市長さんにお約束した金額を達成出来、現高秀信市長さんによって完成された事は誠に感謝である。

平成七年度に横浜能楽堂が落成し、高秀市長さんによって式典が挙行され、私共能に関係する者、又一般市民の喜びと共に今後の発展にも努力しなければならぬ事を痛感する。

横浜能楽堂

副会長 堀内万紗子
梅若会

一般にお能と申しますと薪能

というイメージが強かった様ですが、横浜能楽堂が本年六月に開館してからは、それが変わってきたのではないかと思われま

す。新堀会長が、昭和六十年に横浜能楽連盟の会長の任につかれて以来、「能楽堂を作りたい、作りましょう」と衆議をまとめ、センスよく見事に進めてこられ、平成五年六月二十八日起工、平成八年六月に完成となりました。現在では〇〇能、〇〇講演会と催される度に、市民はチケット買いに列をなして、二、三時間の中に完売の状況になっていると伺い、これには市の職員の方々も嬉しい悲鳴とおっしゃっています。

横浜能楽堂は、外から見ても、ちょっと建物の中に入ってみると、気分になります。お見所に入りますと、こけらぶきの寄せ煉作りの屋根がまづ目に飛び込んできて、上の格天井や横の連子窓、そして足元はラベンダー色のカーペット、すべてに目を見はり、横浜市内にいる事も忘れてしばしの時間を過ごしてしまっています。このたてものが旧染井能楽堂で、しかも百二十二年を経てこの横浜に復元したという歴史の重みを、私はつくづくと感じます。

開館行事として六月二十八日

からの華麗なお能の数々、そのあと七月七日は五流大会が盛大に行われました。過去十一回は久良岐舞台で、それなりに賑やかに行われてきてはおりますが、私は今回広い楽屋の廊下を右へ左へと、人々の動きを見ながら幸せを感じました。私も初めて舞台に上がらせて頂いて「先生方から舞いやすい舞台」と伺ってましたが、なるほどと思いました。来年の五流会は、平成九年六月七日と決っております。連盟の会員に、一人でも多く加入され、お舞台の感触を味わって頂きたい思います。

又、横浜能も過去には県立音楽堂、関内ホール、青少年ホールと仮設舞台の演能でしたが、四十四回の今年からは、いよいよ本格的な能楽堂での演能、皆様と共に喜びたいと思います。来

年、平成九年横浜能は十一月一日(土)が梅若、二日(日)が金剛と行われます。

能楽連盟の台所は火の車

常務理事 富久謙会 原 博之

連盟の平成八年度総会には、去

る四月二十五日、横浜能楽堂の第二舞台で、能楽堂の「連盟会員の内覧会を兼ねて」との特別なご好意により、開催させていただきます。

魅える旧染井舞台を心待ちにする会員で、松の香りに満ちた総会場は溢れるばかりの盛況となり、活気ある質疑応答で議事は有意義に進行し、すべて原案通り承認されました。

このうち、連盟の財政状況を今年度予算についてご説明申し上げます。

平成8年度予算 (単位: 円)	
支出の部	収入の部
五流大会費 290,000	五流大会会費 300,000
能楽堂落成記念事業費 200,000	振興資金繰入金 213,701
幽玄発行費(年2回) 190,000	会費 340,000
総会費 120,000	能楽堂落成祝金 170,000
会議費 50,000	前期繰越金 69,624
会費 50,000	雑収入 5,000
郵送費 15,000	
備費 40,000	
雑予備費 143,325	
計 1,098,325	計 1,098,325

まず別枠の「五流大会費」は出演者負担金によって賄う、独立採算の事業費であります。また収入の部「振興資金繰入金」というのは、能楽堂の落成記念事業のために、かねて積立てお

いた基金により、能楽堂へ記念品を贈呈した。本年度限りの特別収支でありますので、これも別枠とします。これらを除くと、当連盟唯一の自己財源である会費収入は、三四万円です。これは現在の団体・企業二千円、個人千円の年会費では、今後これ以上見込むことはできません。

一方、支出のうち総会費一、二万円と「幽玄」発行費一、九万円の固定支出だけで三、一万円となり、財源の余裕は三万円しか残りません。この幻のごとき予算では、会議費、慶弔費、郵送費、雑費の合計一、五万五千円は到底賄うことができません。

平成七年度は、前年度繰越金を九万八千円余り補填することにより決算できましたが、この頼みの綱の繰越金も残り六万九千円余りとなって火の車度限界。そこで今年度に限り、各流派より能楽堂落成祝金として一、七万円拠出していただき、なんとか予算を組むことができました。しかしこのままでは近く再び赤字決算となります。従って、「会費の改訂も止むを得ない」との声もありましたが、種々検討した結果、会費収入を増やすには、まず個人会員の加入を促進させることを考えました。そこで五流大会の会場を、久

良岐能舞台から新能楽堂の本舞台に移すこの機会に、出演者は総て「個人会員」になっていただくよう、総会でも強くご賛同を得たので、各流派に趣旨の徹底をはかりました。そして多数の方が個人会員に加入され（団体二、個人六十増加）七月七日の舞台披露五流大会は、二八〇人余りの出演者で、めでたく盛会裡に幕となりました。

旧染井舞台に上って、謡い、舞うことは、能楽愛好者の誰もが叶えたい夢であります。連盟としては、全ての会員が出演できる大会を目指し、組織の隆盛をはかり、将来は、春秋二回の開催に発展させることも考えております。未だ「個人会員」として加入されていない団体の方々には、個人入会を是非お願い致しますと共に、市内外の未加入の各流派曲愛好団体・愛好者各位の、当連盟への加入を、歓迎、お誘い申し上げる次第です。

称名寺の薪能

喜多流 畠中 朗

最初にお断りしておくが、私は余り薪能を見たことがない。群衆のざわめきに土埃、姦しいラウドスピーカー。いずれも能とは異質な世界に思われ、つい出向くのが億劫になる。

しかし、豪華番組の今回は別である。はじめの仕舞も、人間国宝・粟谷菊生師の称名寺に因んでの「六浦」と、横浜での喜多流普及に努力しておられる出雲康雅師の豪快な「船弁慶」である。更に、能は斯界の第一人者・友枝昭世師が「羽衣」を勤められる。これは見逃せない、当日、称名寺へ馳せ参じた次第である。

予想に反して、あの広い会場では、大観衆のざわめきも気にならない。照明に浮かび上がる白木の舞台も、緑に囲まれた観客席も、広々として大らかである。



黄昏時、称名寺のライトアップが、また絶妙の効果であった。池を跨ぐ朱の橋桁に光が当たると、池水に映る煌きが心を和ませてくれる。席近くの四十メートル近くあろうかという樫の巨木が会場を守りつつ、舞台を窺う風情である。その梢に半月が懸る時、友枝師は序の舞を舞われるのである。千余の観衆は、翻る真紅の長絹の袖の美しさに息を呑む、といふ趣であった。

思いきって省略された「羽衣」は、それ故にメリハリの利いた、サラリとした味わいであったと思う。

キリで、橋掛りでの昇天の舞に至ると、観衆は既に、夢心地である。名残りを惜しみつつ、消えんとするシテを、地謡が「天つ御空の、霞に紛れて」と謡い納めんとした時、白雲か、

棚曳く霞か、幕内より白煙が湧き出たのには驚かされた。謡通り、霞に紛れて失せるシテ。その時のどよめきと大喝采は、この趣向がこの新能に相応しい、その成功を讃えたものであろう。後日、識者に伺ったところ、あの舞台は梅若流から拝借したもので、その折、この演出を勧められたとのことであった。通常はまずお目に掛かれない事が、薪能という舞台では、大きな感興を生むこととなった訳である。

昔の能もこの様に、大自然の下で、安らかに見物したことであろう。稽古本片手に、シテの一挙手、一投足に見入る自己への反省。些事に拘泥しないで、

能を鑑賞するゆとりが欲しい。面白く拝見しながらも、若干、自省することのあった夏の一夜であった。

歴史と能面ブームの今後

面打 岩崎 久人

昭和五十六年九月十八日、第一回「横浜能面展」が馬車道で開催された日である。当時はまだ能面もブームではなかった。上大岡に面を作る人がいると、人からは聞いていた。出合いはすぐにあつて、能面の会を作ろうと言う事になり、週一回の講師を頼まれて二、三ヶ月通った。今の「面友会」の始まりである。私も「面の会」を持っていたのである。一緒に能面展を開催したのである。二回は合同開催にしたが、三回目からは独自の会で毎年能面展を開催した。あれからもう十六年になる。その間、面友会から独立して教室を持った人もいる。今、横浜能楽連盟に関連している団体は私の会・「面の会」、上大岡の渡辺吉正氏の会・「面友会」、渡辺氏の生徒であった田中稔氏の会・「面寿会」、の三団体である。私の会・「面の会」は毎年横浜能と同時開催をして、金春流、宝生流などの能に私の打った面は使

用されている。その他にも、朝日カルチャーセンター、読売文化センターなど、いたる所に教室があるので、ねずみ算式に増えているのが現状なのである。私も十年ほど文化センターの講師をして来たが、その講師、先生と呼ばれる人達が、ほとんど能も観ず面の勉強もしていないのである。「能面師には免許もなければ資格試験もない」。趣味で面を打つのはよいが、もう少し能面として舞台で使用に耐えられるだけの面が打てる人が講師又は先生をしてもらいたいものである。今、神奈川県は自称能面師を名乗る人達が五十人近くいると聞く。これは全国一である。教える人も不幸だが教えられる側はもっと不幸な事ではないだろうか。今ほど能面が軽く見られている時代はない。故に今こそ面を見直す時が来ているのである。「幽玄」の創刊号にも能面について文を書いたが読まれた方もおられると思う。能面は美術品ではなく、能に使用するための能の道具であり、インテリアとして壁に掛けて楽しむ物ではない。横浜にも能舞台が出来た。これからも益々能面ブームは続くであろうが常識と自覚を持った人達が能面に挑戦し勉強をしてほしいものである。



五流会に初出演して

喜多流 千代島節子

出来たてはやの横浜能楽堂で、舞わせて頂けるかもしれないと聞いて、恥も外聞もなく先生にお許しを頂いてしまいました。

「後はどうなときかなろたい」という、おてもやんの性格そのままの私ですが、舞台の下見だけは、無理を言ってさせて頂きました。その時に、舞台が少しゆるめである旨伺いしておりましたが、実際にいざ拍子を踏んでみると、振動が全身に伝わってくるような感じがしました。声もまた、舞台全体に包み込まれるようで、何ともいい気分です。舞わせて頂きました。出来栄の方は若手? ということで、大

目に見て頂きたいのですが。私のような初心者も、気前よく出演させて頂きました関係者の皆様に深く感謝致しましてこれからも精進致します。

雑

感

観世流 梅若会 森田 英男

謡曲の稽古をはじめてから三十有余年、なかなか上達しませんが、幸いに能を鑑賞できる機会には恵まれ、とりわけ昨今では能をみることに無上の楽しみを覚えて参りました。能をみて感動し無我の境地に浸れるようになったのは、私の大きな喜びであります。これは偏に自身の仕事の合間に謡曲の稽古に明け暮れ、又、観能を重ねた結果であろうと思いますが、私も今は仕事から徐々に解放され、これからは謡曲を楽しむ、さら

横浜能楽堂賛歌

上へ... 掃蕩の心... 染井の香... 残し... 華... 古典文化の大輪... 謡人達の... 作 秋山 尚

横浜能楽堂完成記念に拙作の賛歌にて御祝い申し上げます。

宝生流 秋山 尚

には能を堪能して生活に潤いを持たせていきたいと念願しておるこの頃です。

さて、斯様な折柄、かねてから同好先輩各位のご活躍と、業界重鎮の方々のご支援と相待って、ここに国立に次いで横浜市の立の古典芸能の殿堂たる能楽堂の完成がみられたことは、慶びに堪えません。今後この立派な施設を充実した運営で、他に誇れる横浜能楽堂に育てていくために、どのような施策が望まれ、その実行ができるのが当面の要諦といえるでしょう。

能楽堂への道標

観世流 藤本 圭佑

桜木町駅で降り、広い車道を渡り切ると「音楽通り」入口である。傍らの小さな植え込みに真新しい花崗岩の道標を見つけた。見知らぬ街で親しい友に合ったような感動を覚える。

この通りは、丘の上の音楽堂に行き来する道として名付けられた。低い家並み、狭い通り、中程にある瓦斯灯、これらすべてが明治から平成への時の流れを映している。

突き当たると紅葉坂、石畳みの坂の下と上にも道標があり、行先を示してくれている。登り切ると紅葉ヶ丘文化ゾーンである。

掃部山公園を経て能楽堂に至る道は、桜の古木が繁りこれから体験する夢幻の空間へ誘うまさに「幽玄の通り」と言えよう。新しい能楽堂が、二十一世紀の能楽発展の礎になることを期待したい。



能楽堂便り



一月下旬に第一回特別公演

横浜能楽堂では、来年一月二十五日(土)に、次の通りの内容で第一回特別公演を開催します。

能「鞍馬天狗」(観世流) 観世曉夫ほか、狂言「昆布売」(大蔵流) 山本東次郎ほか、能「葵上」(観世流) 観世鏡之丞ほか。料金は正面五〇〇〇円/脇正面三五〇〇円/中正面・二階席三〇〇〇円。

十二月十五日(日)午後二時からチケット発売開始。

二階展示廊で常設展

横浜能楽堂の二階展示廊では九月下旬から「初めて知る能・狂言の世界」と題した常設展を開催しています。

この展示は、能・狂言を全く知らない方たちに少しでも理解を深めていただく、と企画されたものです。

能・狂言の歴史を解説したパネルや謡本、楽器、装束、演能

の写真パネルなどが展示されています。

常設展は、年一〜二回開催する特別展の合間に開催します。今回は、二月まで開催を予定しています。本舞台を使用していない時は、ご自由にご覧いただけます。

編集後記

六月末の開館式、記念能に引き続き、七月七日には会員による舞台披露が行われ、御寄稿の中に、新しい能楽堂で謡い舞う楽しさ、今後の発展への期待、決意が述べられたものが多かったことは頼もしい限りでした。

一方、原常務理事の「台所は火の車」、宝生流秋山氏の「能楽堂讃歌」も御熱読下さい。

末筆ながら、文化振興財団より称名寺新能の写真を拝借したことを厚く御礼申し上げます。

(N記)

横浜能楽連盟 連絡先

●文書郵送又はFAXの場合

〒233横浜港南区丸山台二二

九一七 新堀方

FAX 〇四五―八四四―二九〇三

●電話の場合

横浜能楽堂 佐藤正美

TEL 〇四五―二六三―三〇五〇